857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

857-118

源氏物語抄巻第十四

目録

ひてき木

よこ笛

すゞむし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

以詞并ふる表紙　源氏四十八末乃巻　扶桑

事あり給ふ御寿にそなへそのるゐなり

れたる小方　拍子木　心をむくてとそむものせ

られぬ拍となり

つくねもの　記念をたのもしき世　淫乱ゆまもせうそ

らぬを経こしそ心世よ心ゆくめんをいのくとなり

おりひめのかミ　天下の拍政（ツヤウ）をとせ

ひらけゆくつ　一ハ女三宮　一ハ女二宮

一ハ天下の拍政（ツヤウ）なとなるへし

あへての世中　大切なれ我身　のうそうみなへての

せそともうみのけうくん
野山みも いのくみの世なもいもと
山みもの海やふへらもん
御里ひの一のことなるぬ 一ッ二ッの首なならみ三の事ん
されへくそうう 立ろうすとや
れもちとせ うくも世よむかの御乃りれそあへ祖もち
とせれ松なくふ
なけの名ともなくなるもみ三ゆを思ひ給ちんとなり
なれ情と同心ん
ゆとりおりひろう 最出乃为をいうこうこう
ことりおりひろうてゆとろる

せめてなるくへそ 一ゆくなりう
ふの一と源の垂礼と思ふを恵と思ひ給ちんとゆる
ひとあらさふ一 おや ほをのなるゆ一
松もうえぬ 浜川 松なの多く注給ふん者もらそのみ
みこすそそける
今を 久言
今をとそ 思ひそ打煙みの給らんとや 引方不及ん
心のやめて 此一云ふくむをやをめんとゆる
給給みも 指のめれとのめいや
ふをとめへし人うくぬ世けーをえへ
この人も 小治給や

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

わきもろこの　女三討　人乃母の老をそみ〳〵せま
うそきこみのあすうもいろのふ〳〵まう
ほひなし上　双地
もつの一言なる　源のふ弥也
う〳〵き山うう　或相経云　俊若小角役行葛城山に相済ノ
文砌ノ鬼神ニ被ル水葉葺ヲ不用答ヘ即ち呪縛ニ之ク
文武天皇代人心事ニ元　不定ニなるもと　仍法祝
れんうやう〳〵
あのひ一日を　今対面し給ふとうふ出た
う聖なり
ゐ〳〵つべたゐ一日ニ元　つへたまう〳〵

おそろ〳〵元心もや　浦べノくしさと世俗うつふみ
垂相遠元
ぐらにのこる　世継物語云　対平ひ三男敦忠中納言
ひうまつ〳〵ひおれ対策師経をよまをうみ十二社の
うう〳〵ひ〳〵大おとう云と云て我こひをくれとそそ
空てうのまく死ぬ膿病のふみうひはうふ人なき　死
号批把中納言ニ　教忠後三位天慶六年三月七日薨批八
おそなひ　老ふくと也
う〳〵ふ相芸と　ませれ妻傷なく〳〵ぬ験者ととる
何の罪まくもの一　女ハ勅ニ
俗後へ行とある詞

むすめ世ゆも 葉平二条后を外てかくもてかくれなる
ほどなりて 源の御威勢とや
女の夫あやまちも 須磨まで月を見給ひしうらやみ
ひ深きいさごのうへ 遥別のあやまちするひとあり
海とひ初めて 恋侘てよる
為ものの色うきうらめしげなる
ひをひとくめ むむを乞の事なり
ひてわもめり 指ひ恋 女三宮を思ひやりこの御や
なのき世乃ふる 指なんのかうし指なんの
いとくおもひきとや思ひさん乃むの

ひくるし文御事 此懐紙姫
み巻を 猫なれをみ巻を又読人もなのまゝとるこ
ひくるしう文なるう いつそうなりひ忘ぬさんさて
そはりて人目をお母ーめをそ推量していめく
とゐ名とほゝれ文ゑやおらんとも
とや 女三宮ほゝそて 道ゆく人乃
野原ハ御前初てゑやりひ乃をみまくへよ
此源院ハ源氏の定家おお大裏仮と後ろ御院ハ新てめく

ふいのくとて勅使(キヨウシ)あり 奴(ヤツコ)に着陳(キチン)して後道(テニ)勅使

思ひ出と仕(ツカ)うまつるとも 物ひねもすなし

そくおへう 拍子(ヒヤウシ)なども 笛(フエ)の音乃(ネノ)ミ

多(オホ)う 拍子(ヒヤウシ)なども

夕(ユフ)さるて 引(ヒ)き 来勅使(キタリテキヨウシ)そくタの吹節(フキブシ)なるを

むごふなへすへて 管絃(クワンゲン)の遊(アソビ)期 何事(ナニゴト)をするそうそろ

ことりくへたるも許(ユル)ひ一人(ヒトリ)なとなり

何(ナニ)の 拍子(ヒヤウシ)討

思ひまうけ 源(ミナモト)の中将(チユウジヤウ) 拍子(ヒヤウシ)密(ミツ)なくてなるもの

年(トシ)きもりのと 人(ヒト)とりあつめ

しめするを

ちん宿 結宿 イ本

生(ウ)まれぬ うれし 誕生

又(マタ)くむくるし 男子(ヲノコ)ハ

人をあたみをもあつ

そそろ 数盡(カズツク)へ 容遠用果(ヨウエンユウクワ)や

ひのりとめまは 生世(ヨノナカ) 報(ムクヒ)るを

ふのさ孫 ひへ子とのむれ

申文 秋好 そそくて

ふの色(イロ)どり 法験(ホフゲン)も 名(ナ)ともる仮(カリ)の

ちやうれの一(ヒト)つぎ 廳(チヨウ)の一つのむなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

大文字の　中文院の殿上人さ　冷泉院のや
さぶれ　あれこれや女三を思ひやりなどして
みかの原　わきあひいづみきれむあり
さのこころを　いよく源のあやうふれかりをこそん
とやちのこきなどせやうやう女三のかくと聞(きこ)えてや
さやうにみえて　尼(あま)ども腹(はら)立ちなどするのみ猫(ねこ)もなのうんと
おりひろくも源氏は心中
心をのれおもんの　女三宮の源氏うしをのきおもん
となり
おのれ！　堂上(だうじやう)北野紅(ホンゾ)ひーを法中腸(ホンゾ)となり
年(とし)ごみなて　女三乃法心中ふ煩悩(ジョウイ)院、恋(コヒ)ーさわか

しめて泣(なき)たまふ
うふかくまて　殺(ころ)すまて
ものみちのやう　人の親のこころ
おりふしにつけて　ひめうれ
なりまの　名理ちのひてをくまた
みのうち　法出家(ほつしゆけ)もや
うら山ーく　源氏の見(み)まうおなり
まつくひめよ　源討
うひのうち　光の法利(ほうり)や
ちなうち　おなくれ
うんとそとや　紫乃おかけ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

そらおそろしくやう　尼なとう聞てもなほなと又いのくとも

ねしもめくるん　源討

ざけ　邪氣（ヨキケ）や

うれふ侘けぬるそ　物氣（モノケ）に屓（ヲ）てもかゝる事ゝとうも

御心地うち　紫乃上（ムラサキノウヘ）

何うそ　白　人わらは世上（ヨノナカ）と服（ウセ）とをなくて泣煩（なきわづら）ふ事

て尼ふるゝ　おもうんとの御心

あつまとゑなりし　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ

とそおもて尼ふなゝ　泣（ネ）よて妨（ウシロヤ）

給ひゝ　三条ゝ　みとなり

そうぜんよ　三条ゝと紫乃上へ第ゝをしゝ

うつそ　養生のそとなり

これなくてうゝゝと　ゑゝ三のつれ

そむうそ侘ひめるるそ　晴

みゆき　前駆（せんく）交のこゑさきとのなりひ出られ給ふ今

日北御門の祝礼（ほかひ）をも只今そ

さきのゝとなり長（ナガ）うす御乳儀（ヲナヂ）をみこ給ふとも

世中　朱雀討

又たる人　ゑゝとありけ行ふへ

きあとにて源へありけやゝ

ゆうふゝく　源討　源氏もひ乱

ぎや　後夜や

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

うつる色にして　尝上をはじめ奉りて公私忙しう又女ご
今八の巻うすん　栄花物語よ小一条院女御殿光女ゝ邪
気まそ出堂のおこ乃久しくなやみ煩てゆくすゑおぼつかなう
てまおてまらひうち事あり　下略
くやーう　耶氣加乃出家をくやくやしくおもや
此文ゝ　女二文也
今一たひ　招女二へ条てみ〳〵せられとる
ひ文乃　海家ゝ事をなり
二品の文　女三文のうへ
たへぬ琴乃　不堪奥也
母うへも　招の母へ

右大弁　紅梅乃れとそ云人也
まろこひう　大納言乃条旅うる
是たあらひ　不堪忍成也
大納乃　祝言乃夕旁条うれふや
みられなう　端をなくまよ
きふをよろこひ　権大納言ゝ牧也
なとおく　夕討
いとうおう　招討
色列はうう　礼浅也
ほうぼひ　髴　暗
とくれをれ　来ゝなりの条や女の中乃ぞくまさ

装束（シヤウゾク）
栄花（エイグワ）
煩（ワヅラ）
耶氣（ヤキ）
不堪奥（フカンオク）
祝言（シウゲン）
権大納言（ゴンダイナゴン）
装束（シヤウゾク）

きたのためのなくらん
心うきをもくなる　拍との夕との中ゝそうる
云かつのうまつるいまそ　ひる——
もろくしうぬ　させ
おのことをさそ拍ゝそむ中かいさこのあとゝも
女三ノ宮事なる
それの迷ひまさ　拍経兄弟なとゝもゝ
病ひさ
院乃御方　朱雀院
ひうもん　源氏ノ
ろあう　ろんうゝ

ひうゝ　のんたうをゆうー
ゐうれさやう　夕討
けかいゐうの　拍経
今日あとも　作井かゆくみちゝそうほてやしのと
きよふゝとをおもさうー
今日不気味明日不気味方角ノ忌
そくう　夕の御酒とおもうんとうると
ふのうなう　今如何あらんとを我なうー系ー
いろやさんとをゐー
てうゝ　ゐてゝへゝ
女御とし　冷泉院乃女御　拍ゝ妹

大和の法師ども　をり侍るや
なれ大とものかた　むつかしき
やむ事　我こうそみぬ人こふれ病るれあやまちかう
やむ事なる
あそのきこえれ　世路(ヨロ)界(カイ)寧(ネイ)固(コ)如(ニョ)水漂泡焔(ヒョウホウエン)　注最勝
寧人の所給(タマフ)ものの心も
ト乃心そう　女三宮(ノミヤ)産(ソコ)をさもなりつるを
うちつくみの　指(ユビ)ゆ久しくみまゐ文(ブン)
ふと人をうと北指そうきこ
おとしめ方　我院(ワレヰン)　我仕れ
み淫(イン)して書とや　花中暗(クワチウアン)　教(ケウ)
ともとて馬(ムマ)となりつれそ法花(ホケ)
なるこ来給そう我をりてそ住へのうこあれ
あ尺(シャク)文　女三指をうこてくる心ひしのとものや
わの表　善の事ありみと指(ユビ)
指のうこと　聞(キヽ)ゆ文(ブン)おそなする神なる
通(カヨ)ひ北(キタ)さ　女三尼そ服(ブク)をまするや
指(ユビ)ふりちい　又十日縛(バク)
かさちことなる　尼そ服(ブク)をや
ああもの指(ユビ)ちくこう　男子(ヲノコ)るれそ尼(アマ)そうこ不安(フアン)とや
りと乃心を　女三と指(ユビ)との密(ミツ)事(ジ)となり
むるこう　源の住む

ゆくゑ乃すゑ　浄尼とそ喝食の事也又来ともさふむと
もぎすぬ　次こ透くとこゝろ会釈もありていかゝ
ゐてくゝ又いふゝ
いかやうなる　紀掬うちもあくゝ源氏うちや播磨近代出来
よろつなり
ほどもの　わさあひろやうるゝ今もた由まれ作るむること
めもくゝあゝ　くゝきむれ　ようおよまち
みうのたゝ　涙れおもそゝ今もた由まれ作るむること
とうう色す　物かもうれや世事をみしなゝゝの我ゝ
男とおもふん
今ハとそおもふ　尼よ吸ふるとて源をいとひ給そゝ女

三乃むと世ぬすてゐふとうゝかうんとや掬氣の
もふる事を含ゐうふりのゝのうんを源氏乃ゝの系
しうんとなり
うゝおふ女三の討　うひなのことや　源討
おゝゝゝそ　掬れ氣也
女ゐ乃文ふう　的石中文の西服　山西服れそけたの
王前行て　旦緑の紀ふうとなり
あの云いて　意也
ふゝの月おうゝ　只今うゝうのまゝ指の面就となり
ほおこの　服の肉れ汗也
又十八　とよむ

まいりおわりて　又十八前方の後　静思堪嘗晩
持盃祝頌妥他適　憤忽頑愚似汝爺
樂天仙冬早下也樂天又十八男子也設ける迄み
むりひくの俚　源氏今四十八まて面白やと詞この
相逕歩一の詞や　茶をハわまみ不徹やと詞を汝又
指よ似給ふなと也と詞を書かせ給ぬく
あの事ノ乃ひたまふ　女三と指よの本一立ならんとや
おへうん　敵　打泊てそくとそ云ひ給ふお前乃心やむ可笑
ぬたりいうまふ　源乃御とろを打泊てそひてみの御
たのあとなり
指のこうして　慈光院

おや是乃　役仕お方や
そうるもの詞と見　引奈不用
たの世おり奈　挿弓戒へのやうに
経とまれ給ん　ひを明や
さふそと　女三のれそうは
密通ひ事をとる
とあ一指おかそたる　指よりうとなるまて時とや
又云や　二条表裏上乃御出家をそゆるし給ふ不審や
おむのこうり　指のちやうに
おりひやると給ふなり
ひとそう　指許と云々書の定ひまくめく思給人里此ニ下ニ

とり給て指出ひしのとあやまち給なの事ありや哭
むすめの契と　昔の春世となり
女君うたふ　を弁官へ
ほく〳〵　侍従（ジュウ）　御達（ゴタチ）ふ姫君（キミ）
と祝を施丸
まれふなきの殿う　我仕大臣詞
申くみちまさけ　文机（ツクエ）ふるまの装束（シヤウゾク）ふ
つてふ乃冥途（メイド）乃さうさなる色一とする
指作りなくて　作物（ツクリモノ）ふ
このこゝろひ　ほく所ふ
ゐとなりぬる　法会（ホフエ）　涙（ナミダ）よくれてむれさるなり

ゆふ元やうふ　指も先とふ伍なる色一又さかりてし
おねとゝ〳〵おそ〳〵　注文（チウモン）ひむや　いくみもの袖あり
双地（ナラヒチ）とひねてし
弁の君宰相　指兄弟
いみ〳〵き　夕討
これ〳〵ふくみも　指の兄弟ふあてむとや
我わさ　二月ふ我身多しし年中行事ふあり
ゐるの時ふ参ていまんもいう〳〵文
ゐるとるを
れやあの通乃　兄（セウ）やめ二ハ文乃ひ申ほそう

かゝれかしなのらひの　婦まのやう
なることをもこゝやをかの詞
又たくひなれ　書うまやせけ理とも
なほしいまさる　後朝のつかハしのてをかしめり
の迷ひなれとなり
かくくに　拍と又後朝の
をかつ〳〵ちのき　拍と夕と涙こをそて自然うきく
なきもんとなり
もゝめつ〳〵こゝろ　拍方へ
匂つ〳〵れむとをきて　拍鼻不乃ひのをとゝめうゝやう
思ひをとや

みつの〳〵れ　つゝくあ〳〵うひゝーさん袖とゝる
みとたちそ　白
おやろけの事なて　たのことれ事なゝ間めるく
しく契あ〳〵ふらんとるとゝ
はれもそさりゝとなり
そみるも　後朝乃なく廃行をとゝるゝ事お
う〳〵又いめくとやさすのをうやうふも不成るとや
拍なまそ　今初やん情あるてし
ふらひ度く
ゝそのの　討つゝさのほるを　ひの白と可切
拍なまそ二と中とろのかる拍子ゝ鈍
うひとき行ひーるとや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

あまのれ　拍遠云々　夕雾兄弟なり

うれしきを　うれしきをうれもひそへよくわの

きあそのそなみくるまうらう

いとことよあう　兄弟をあ門に持れ事をたゐの短歌へる

ホ三拍ん　あろく年ととよむを

あ月ころの理を　包不及のひ元　をよろこととを明なん

事もうをく成となり　すこ道ひ分ともれるやもそれ

むろくうく年　あまり遠ひめそと結ふるやも

拍めやときうや世上ともあれりめそと結ふるやも

ものおもしなけく　源氏物語　夕雾巻をとて出給へる

の条を　拍の事　夕雾のむろ女二と会ふ

あそはうろへ　源氏の歌を乃拍ひあくひあくを今年

もうをき墨染うさけ

りんくふすち　夕雾のむろ女二と会ふ

うりてこいみくるひやられをあひみん事はく

乃拍へる　哮

あひみん　春毎の花の風をそあうふめとなひみんくて

その托ちるとうり

時しあまたる　夕雾拍子を拍乃事や

わさとなくぬへ　こやをあへとをひてなくてなり

あの春その　宿曜所の逸言　月ゆそとをめ子　源氏よ

せたるを咲ふもをかしくて万事ー涙はらりとなり
てぬうえ(ウエ)ー更衣のむりちなるのみるにそをかう
ーの亜子初と夕れむ産や
出ぬれ叫さ 老乃殿や てひとうひん
れやの者うちも 親乃巻(マキ)ん(ン)とろのるもしーんるれ
ちゃくくりん里 三条宮へ不巻の法(サタ)あるもーなりみれ
たあるを巻(マキ)と尽(ツ)しうんへるを
ひんたて 我仕とタのや
御車ーく 抱とタとるる
よーん そう紙(カミ)とも同事ろーや
山里はぬく そう紙(カミ)の手れ詞や

老乃殿やく老乃 変れるー我仕の詞
みる人をく多う 女を殺人少放ふなーひもう迷ーるもく
のかなる色ー
もうくしうう称と 抱の進退(シンタイ)や
あひるのむへく 家礼(ケライ)なく
女のきおりひそ あるへしく
みもようすくるなく
なのめ物るる 夕くれの雲乃をしきをみるのうふ
めーと思むしう作男 ふ用 大宅を遣し文人れ死ん
のそ相思みくふなのめらなん 可然ん
きこう 夕雲気なのめ物ふや

このころ〳〵紙よ　御墨かの
あの下れ方　我仕慮安　墨乃衣とそへさう　嬉子(キコ)乳記
もと乃服をめをれ　今も(モ)
手すと云ふ　　　

とかく　せうとあか間や
かと拍あるれや　夕乃心中
拍うることろ　多物うらう
故さ一のう一　連理れむ夕雰
未の一れあとあかを望そ
ことなるは　夕ゆ心なるも
とあるむなる一
拍字乃おくるむ引字但を
大和拍経　拍也左右伸平り
もこうう気よ拍とわおけう
我者とのうれ気のなる一

みをとする　拍ハギ
らそうわしさるさもの
と藝俊ろく　名雲徳まれ
時一をあまをそもうの
一も未　とも又俊乳
うん月おる気れも向
夕雰の字を学る邦と拍
拍ふる字　如二文の字
なう心そぬなる元
ねけう　心君は書信も
ね泊しなけく　夕雰討

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ひさうみ二九事ととタ雲乃ひさうまてとん
きくおひーるるを
へわうされ　拍へうひきおろ人あおお又也拍みも
別おろ事ーとろろ色てとタ乃ひま
ふくなーねそ　拍思ひなーふ拍へ乃事ー安中ニ活ヤスイクロ所
ろ思ふへくそ　拍のめニへひとろ拍ゆとひきふ人を
うこちうめと　拍のめニへひとをめーい定テめこちも
をくれふるのとなり
みるめおろる　こめのこちおうあ又心城よするを
いうくと世上を思ひおくる
さ気まーさそ　うれ拍をるれなひをまとそさんもち

さるのうやふくひりろうん用とや
今そ打若ふ　ひ短ハ齒をりひ初人里拍とそくあや
しーめそとるる
そくろのーふ歌さや
のれもく　拍也　花多相遠　おとくを取れ字これも
夕雲の
いふちやうぐん　右ヲ軍可笑人ふれとふる世ろーや天
可笑人みくこすとりふそ不ス信ニとや
や拍雲句と云拍みあり　天与ニ言人ト　不ス信ニ右ヲ軍裏ヲ
初テ秋　紀御門
池ハ白ひ対ヘ平ノ男保忠ま事ー元　秋とあうをるし

をり給て如月のころや 大将
大将の軍幕下ゝゝ大将
舎弟の軍とうへおもひやるに
うれもいとうき 私勘 暗
大納言三位中将奥州按察使(アゼチ)を追討の為
奥羽を保元平治の年七月十四日薨 四十七号八
條大将(ノ)時平乙一男 中納言風雅(ノ)元妃保元以相続(ス)
時代のうつりうれをそそて数てまうらるる
き事共ゝこゝ世中かとまて死てしんとおもひ云ゝ
むへくもあらす(ニテ)実なるかなしさ山賤の
歎ひしんとも

うへうへ 今上也 沖琴乃師匠也
沖心(ノ)ゝ 源
ゆくすゑなとゝひいさうとイ本
哭平 ヨのなの下乃書写と筆方同意のりひ治ふと云
ともたせる

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

撲笛　笛を撲ち　管弦笛や　名云撲笛とゝゝへる
管を弦竪　笛を撲や　笛漆や　字注異類ともの〻〻と
云心ち　ゝゝふる寒ち詩ゝを翻とはゝりあり
源氏四十九才　拍木を打まゐるの秋乃事ありゝゝ
は次ち年春乃事あゝなりの秋乃事まであり〻ゝ寒
有摧大鴻言　拍ち　拍ちといふのあゝ〻〻班固傳ゝり出ゝる詞ゝ
ゆるく成ゝる拍と云心や
いふかうや　女三へ密通乃事
源氏ち走ゐくへを
拍ち一周忌二月
源氏ち字めつ〻ゝ云ふるを
ゝゝつもゝゝを　其の折　それ
こうゝ百つもやう　李尸王記云　天喜十年三月十九日

佛八講結願　大宮大納言拍板設供華八講
条入て叶夕講や余波風通ゝ須弥南面瑞南仏金百花繍幡
擬盡ゝゝ小講　別ゝとあるを其の
れゝゝを心もゝ〻〻て　段仕
ゐち除ゐうを　拍の事
ゐゐ一道ゝゐう　女三尼小般涅槃
ゝゝ去ゐ小折や　一巻経生ゝ云ゝ
ゝゝを　女三へ来ゐうを
たのうか　最上吉日　ゝゝは看経出抹香
逆筆来抽風管　遏雲飛鳥　朗詠
折雁多れひ方折笛ゝ云ち　冷果院へたのうかまゐ也

ゐたてまつるを　花山院法皇　世中おもうひ
もる折ふしを我つむ年をたてまつるなり
年へぬる竹のよひとうきものはしてもいせをなうくる
さんとそおもふ
ところなと　春の野のおもかけをとゝめんとや
時　宰相法師　志乃夫おもかけをとゝむとのなるかみさ
をぬはらうみてるをや　春めくまよかれく
みをとなのつるをせうのおなさんのなめる
春の山のすゝも　志乃夫来らり筆あるへき文也
世にわの道の　山路なとゝうをとゝれ給ふとも後せをゝ一
無能せを執行く並上并を行給ふ事お憚とるを

へうん道をいるをよの道者（カウジャ）ありや同面を捨（スツ）るや
おそとこゝろもとせ給へる
いとかきわさおするん　地蔵菩薩本誓（スイクワンゲナンニウ）
法花の不限貴賤（フゲンキセン）解脱（ケダツ）のそとおもひめ給ふ詞や
らいとも次　豐子　又柵子
わうせをさをそうとうてよそめ
しる指なる指うやをさゝめうたのくをを
肉を柔濡（ニュウジュ）かをを黒漆螺鈿（クロヌリラデン）撥（バチ）こや菓子（クワシ）なとをいおくるを
河の下略　畢竟（ヒッキョウ）抱なといるく器物（ウツモノ）
をみのあとを　法文言　春の山い　端書（ハシカキ）や
なるー而かとを　好文討なをやを聖（ヒジリ）ゝ而白（コモ）し

わまとちへ　源のめ三へをろうれろ衣とひれ申ろ名や
うそり色　めこのあうもうこなひろうや
うそ久世ま々言　世中ふやや　指遷十九　要世めそあ
ぬ一和をそてうれ年中ありにろ町くうん
うろめ〻事　朱雀さなぬりへうまろめたきる衣
御文ありぬ不とあるそ仁条院を離ぎんことなう
らこ汚へを　うろふ今まそひ不育や
つそぬ色く　めこを尼り成(ナ)紗ひしことを情(ジョウ)源氏
の思名なつしものこ汚ふそ今罪とる色
うのこそん　唐(カラ)れ小文唐の繊(オリ)たれ掲元文を紅梅(コウバイ)可成
うまろれかきり　うろ祓うりなる神のうまろへひ文
あるるろなり　白物　揚抑を白文ふたと人略(リャク)気(キ)菓の花を
抑を西つり　あ文にそへたる　共ふ現量元
うこ町〻ま人　まろそれあとく〻と云討や
うれへいそ　指て思出汚へ旦
あならううり　源討
女文ま〻ありる　明石浦服文(ネ)連たこれかの汚ふや
花れ町のまそ　指奏にタ雲乃山ふそれせ一日安なう
むそうそまりあく〻を余ふのこ町ときと心名てうす
さこ汚へれをそる子連れ盤(サカリ)そるへうれをや
春毎ふ衣れ威はありふめとあひみんことを余やろ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

来たるよそつ人心地 みる
る神乃えるまのるまう悲しき
りと称ちけさる 源氏君乃御文
打おみとろみもる気色ともや
て悪ぎ拍れしお仏さろうとい
うれかー もう 要かー そ拍のす
ん竹のこれうきゆーたけき世とも
ねくはるち 筆をひえとろ心
りとそうう うろうー
さえかー 拍のる
为つろの活をくせもれかりね 九めうな事多とも

源も不御息とろ
思かつこ 拍末 か三文ホの
文の活方上七思ろきりか筆と
为不通の活出家となり
もろりやこて 琴なと元礼て悪ろりをのねてこまる
月の活との夕九三条宝
もえ九 多集 万集
ひ乃称 思う拙し一村荷虫乃称のそけきかへとも
多ろうけうれ
里ちふしへ 集を如又状み
こ志 拍

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

云いてめつ〳〵うなり　拍乃ひの事（琴）　あのはしとまゝ　女二ノ文乃ほしとまゝ拍のゆくゑこ

〳〵んとなり　啼

琴のてゝしけ〳〵　有伯牙鍾子期（ハクガシヨウシキ）二人好事や鍾死後琴を

断（タヽ）　なき人を忘信をそて琴のをゝたちしけ月日乃

めくりきて乃り　此巻乃詞　女二文乃此琴てなり

わらてあろひ　栄雀の此巻ま〳〵　石事つゝもせ

てきみこ子菜童なろうのまたちふ連うり

女文さろ　女二琴打とおかめの〳〵ぬう〳〵ぬうすなる

とるゝと

あ〳〵ぬさ海か〳〵　女二琴乃しとゝ、ばうやまの此巻ま

めつま（琴）を　ひの句

あめうきふし　見ぬ海ゐ　浅茅生ゝ露乃

乃うの愛つまと思ひみこゝろく

拍ゝ事（琴）を思ふ此巻ゝ成まく女二のひ文ゝろねと必

いふ理ゝ　夕の詞

ひきわたす　志しさの限ふあ世なりをそう〳〵死

とおもひてなけの此〳〵まゝ　夕雲乃心うニあり

拍ゝ事と思ふてふ人〳〵女二のすをおりる里

そそをゝやと　夕乃君我をゝやをゝやと人里

れ打　夕へ此巻所乃琴を取里也

拝ふそふ　海巻乃詞

山（テクダ）樂（ガク）堪（コヽロ）能の事ニあり夕ハ

拍と云ふ(チイン)の事をこそ　琴のみこと(き)、分く人乃あ(ら)ま(ほ)しへ(け)れ

今うちもてそゝめ(そめ)給へ(け)る

みこと(き)ゝ　妙(テ)聽(ル)神樂(ヲ)尊(タフ)貴(ト)　習(ナラヒ)給(タマ)ふ

もの(の)つゝ(つ)き(き)ゝ(こ)え(え)給(たま)ふ　和琴(ワコン)二(ニ)絃(ケン)也

拍(ひやう)しも(も)二へ(え)調(テウ)子(シ)ゝ(こ)ゑ(え)をきうん(ん)とて拍(ひやう)子(シ)の中

とい(ゐ)ふん(ん)用(モチヰ)ル

ゝ(こ)ゑ(え)うつ(つ)くしう(う)ゝ(こ)ゑ(え)給(たま)ふ　女二(ニ)宮(キウ)今(イマ)ひとつ(つ)拍(ひやう)子(シ)の打(うち)給(たま)ふ

ゝ(こ)ゑ(え)ゝ(こ)ゑ(え)給(たま)ふ　琵琶(ビハ)不(ル)乱(ミタ)ル心(こゝろ)ち(ち)ゝ(こ)ゑ(え)給(たま)ふ

秋(あき)の夜(よ)つゝ(つ)とはなき(き)ね

百金(ひやくきん)を春(はる)かるゝ(るゝ)ともう(う)ら(ら)ふ(ふ)ら(ら)ふ(ふ)ん(ん)

打(うち)つゞけ(け)ゝ(こ)ゑ(え)給(たま)ふ　御息所乃引(ひき)給(たま)へ(え)る　夕(ゆふ)の和琴(わごん)とまゝ(まゝ)め

給(たま)ふ(ふ)ゝ(こ)ゑ(え)引(ひき)給(たま)へ(え)る

打(うち)ゞ(ゞ)ぬ(ぬ)ま(ま)ん(ん)　北(きた)の府(ふ)生(しやう)　又(また)ま(ま)ま(ま)ん(ん)　女(をんな)房(ばう)　ゝ(こ)ゑ(え)ゝ(こ)ゑ(え)

ま(ま)ま(ま)ま(ま)

みのき給へ事　ととるとかや
感(カン)しなうてそもち給へ翌(ヨク)やいちねとふらひ
さまとあるにひ又会(アヒ)くの尋(タヅ)ね
ぬ様まさうそをあ〳〵ぬとや
なきんの　ことも思ま志れ事〳〵ろ
すゑ〳〵くれ　夕詞　昔のとろめを指末れるや
ひ又たりのみる　ことのさへ女二の与(ヨソ)へ添むやうら
んとなり
こうひ給へきまるや　好みそや　こうひうら〳〵ろる旬
尚或(アルイ)すゑ〳〵くれ〳〵さをとり引会ての批判双地とみて
可能(カノウ)なり〳〵ろんとそ定双地や
あてをもとやうこぬうは多と筆者の書り
給へとくろ相ろ笛を　笛のか音
ゆろさことも　見(ミル)ニ山陽(ヤマノヒ)同志(ドウシ)ニ称(カナ)テ　諜人吹笛(テキニンフエヲフク)他同思(タドウシ)ニ
向表　称(カナ)ふ表也　けいのうう諜(テキ)ニ笛吹(フエフク)と云て称(カナ)ふ
成(ナル)ニ非(アラ)ずる　笛躰(フエノテイ)ニ寥亮(リヤウサヤカ)ニ　うすかろりるしころろ
うくおよも又ふれ　違(タガ)ふろもんを知一さとそや
給へさきさうん　給へ者(ハ)ふ〳〵ろうんとよ二和(ワ)なろう
文度(ブンド)とや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118　　ガラス使用

さまとしてあうことひさしくみえねば姉君のおぼしなげく
いりて我と　自然のうらみや
みねばとも　思ひやる時勝くんをさへおもひ
ろき詞うや
かゝる契の月　かくそうるまれ一や思放とうらうら
ねくぬすゝんへりへそうき
こゑ　指女二へいのるれた大かてみをしそや
みとりちんこう　さ祖めゝぬこうこうてしをかり
大かさ世の所為てもうえ文里なくま　玄阪をてみなと
里するもあるうゝや
里の活中　玄井阪との活中一や

打ゝきゝそこ　むとも不要ゝてとるる
おこるなゝひ　夕空心ゝそ別の心もなき放れれるる
て型活くる
笛竹小多　指養中乃多　風とそ息（イキ）まて吹放風とゝう
一ととなゝうそ出ゝるゝや　音像（リウ）を等多のゝゝへう
付て吹伝るまく甚ゝとなゝ我作くんと心意へ
とるる　来の世なのきそ意乃めさへ　決分あ所へ文援
なゝはとなう
打りみ町ゝと　指養ゝ
つゝこ　喚吐（ツイ）　小兒（ヒウニ）の乳（チ）あまをそゝ我ゝ新
みゝこゝさそ　玄打外　いやーきみ乃許とや

かりそめのなら　気のふさがるさまいなりやし
うらまれ　あぢきなよ　われさへあやしきまで思ひ入れ数添ふ（サンソフ）まで
ものおもひあり　おもりかなる事也
なつみて　頬　万葉
ものもいはるる　指貫よ　なしあそばしたる
いへまうこと　我方へ　可来（コムベキ）ゆくへ
一ねん　ともめい　内眼（ナイセン）の時
源氏一会（エ）の處云定　紹文
もとゐたかきやう
世中　むかうく　おほ平て常のむつをせさりければ
源氏おほきおとゝの心をさうしなんて通ふ間ふ病（ヤミ）と

なく成てむなくるもうけり　ほふしの水ふ事と
おほきに　ひる日数乃ものうきの世　なそあり
むつをの　我仕大臣乃方ゟ寺をもつくり
ぜひ（ゼヒ）　なのうつ家ゟ寒ゟりあり
ろまて云うてのそくるもの
佛のみちに　嵯峨天皇弘仁七年（シチネン）七月村上天皇（ムラカミテンワウ）小野宮
殿（ドノ）ゟ　和琴（ワゴン）横笛（ヨコブエ）ふき　絵像（エゾウ）布絵（ヌノエ）像（ゾウ）三位（サンミ）頼通（ヨリミチ）ゟ云ふ
一ぢう（ヂウ）笛（フエ）着（キ）希代（ケタイ）名物（メイブツ）也ふ云ひ
乃心也　鬘（カツラ）破（ヤブ）　乗（ノル）ゟ　ゟ（ヨリ）ゟ

女院の御ありさま　明石女院
三文　白文
ありさまなどそ　白文と當上女一文と後拾遺子ふるま
女御うち今々勢當上のりさへわるまうへも
大將こそ文のりさまりて　大和
とあなさへと自此詞　あるまさ女院れ表方うさふ
おもへし
りこまりて　我なうさ勢をうしなりおさあひ
此御許白文の詞　明石女院うし源氏おそうしますの
たまへとうまさ

みそれまうへをそ　當上乃御前
きやうそやう　狂さ
これうかハ　大和乃歌を人乃みの給ふの
のの詞
こなさまも二文の若君を　明石女院の
たまさ乃事や　うさうしみそそ　源氏の筆一行
むなうる一

院も　源氏
大やまの山ちのさ海そり　を乗れ大和　阿波道濱乃
松原や
あさり　兄の御むさ二文ハ五のさ御へ玉ま乗れ御ふ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118　　ガラス使用

ひの一のこと　のこりたるも　ものうしとうけきこえ
いづる程へり拍事　おとろきたるやうにて
ものもいはぬまゝ　まつのことを女二の宮のおしこめ
のことをおもひつゞけて源氏のいまもおはしまさ
ましかばと　おもひやりきこえ給ふ御心ばへ
恋しくなつかしきにも　なほ人にはことなりけり
とおぼす　女房ども曲水の宴たゞしばしの
ほどをだに　夕へ源氏の遺言（ユイゴン）ありし別（ワカ）れの
悲しさをうけたまはりしに　ましてかくいと
みそかなるうんや　女二の宮をうけ給はりて
さてのちとや　いかゞと源氏の方上をさしもあるまじと夕の心中

すきものゝ　好色（スキ）乃おもひ（ヲモヒ）やう
何のみこゝろ遣（ヅカ）ひもなく　夕詞
ほゝえみ給ふぬ　大かたはれ　おとこと
みゆるく　大こゝろのあるにも
人のやうにとやおもはんとなり
本（ホン）くあんぎ　講義（カウギ）　うたがひ
さんぎなどからめとそ　おもふ
さんとおりひてこうとうを
んとおりてをきて　夕のまく
まこと紛（マギ）らはしのみ
そこのみとのうとみや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

なさそれをさへく　夕霧なほなるうちにて出おはしぬる
うしろめたく詞　きまそ紛ふに面白てのをもなり
客も皆夕詞
その笛　源氏
陽成院の御笛　南文或アの心
酒子　母二条后陽成院ばかり
さて我乃裏（モ）あるへしと可心也
来む世の　後中ノ意か　笛竹に吹よる風のことなるを
来む世なりさ言ひのこさうんとましるや　花
さやうに思ふあるとそん　指ノ差へとおりのみならんかい
ひのさへとろまのふくん法そそ源氏の
その君を　夕霧乃事や
そのこゝろ花を　色ゝり
いまもことのついて　笛乃次よおりの出ふるも
ゝ
ゝゝことを汐人を
ゝれそよと　源乃法心
もの人の　源氏　こゝろ
その笛を　笛ノ指のるまきそくと芸ふをぬなり
ゝゝことゝんとゝ　出ふおとものそそろ〳〵めるる不経
しも救いとある指（キヽ）なく物（モヽ）をいふのあそ〳〵
緑（ミドリ）玉人　唐人也　夜笛乃須磨（すゝ）院

鈴虫　竪並　此詞并序為巻名

源氏又十戈秋をの事あり　夕霧此巻

夏は　六条院の池の蓮や

はちすいれくさ　持仏堂（ジブツダウ）

あつまりて供養（クヨウ）あり

ゐてたつうとせ給ふ　まへくさおとき給ふ　御声

用うたて給へる

はるけくおのおのひ

花散里（ハナチルサト）をゆく　松虫

琵琶（ビハ）　鈴虫（スズムシ）　横笛（ヨコブエ）　鹿鳴（ロクメイ）

先そめ　そうそ深やうの

まのこちやうの乃ひ　持仏堂（ジブツダウ）をお殿ふたて

れをてゐ三れ文の帳壹よ四方ふきわれてこひ〳〵加
のふとよてまんたゝ我四ふらるを狭ゆるあよ我
とゐふるを
まんたゝと　〳〵仏壇（ブダン）といふ
沈香（ヂンカウ）と白檀（ビヤクダン）　曼陀羅（マンダラ）なんやゝ〳〵して仏壇（ダン）と云り
四わもて　指仏尖一間（ケン）四面（メン）の四方我あるを
さてまんたゝ〳〵そのをられ〳〵ると
花（ケ）文と　蓮花なる色
うつの百（ヒヤク）のゐりうや　くの志（ココロ）ざうや　者を唐方を用ム
赤（シヤク）よりさつ　脇侍（ケウジ）　脇侍や　観経云　之量寿仏
泡（アワ）の空中（クウチウ）に観世音大勢至（セイシ）二大士脇侍（ケウジ）たてまつる

うつく赤なり　ゐりうぬ仏や
花（ケ）の蕊（ズイ）と除て抹香（マツカウ）のことくふたうのまく我なろくとて
も花を作てあり四ふへてをく　みらや　今もめり
みらをうつくりうをて　みらと書てこれとよ花（ケ）の蜂（ハチ）
蜜（ミツ）と除て抹香のことくふたうのまく我なろくとて
れむりや虫のたゝと云仏者ゐを蜜を除ゐるを
ひとつかり　ゐ香（カウ）を安養（アンヤウ）花（ケ）蓋ありひるを
これうれ此指経を　ゐこの作事
天慶九年四月四日村上天皇為母后被供養筆花（シヤウ）
経（キヤウ）を八講（カウ）　花山（クワサン）ゐ法皇ゐ
ゐまてたてふこのをの　ゐ文と源氏乃以世の契うをく成

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118　　ガラス使用

各別座(カクベツノザ)ニ着(ツカ)ズ我(ワ)ガ宿(ヤド)ヨリ人ヲ
遣(ヤ)ルトテ 又(マタ)讃(サン)ヲ 女(ムスメ)ノ事(コト)ノ
イトヨクヨロヅヲ祈(イノ)リ申(マウ)スヲ聞(キ)キテ
ウレシ源(ゲン)ノ尼(アマ)文(ブミ)ノ指(サシ)ヲ折(オ)リ数(カゾ)ヘ乃(スナハ)チ
思(オモ)ヒヤリナクテ云(イフ)ニ云(イ)ハレヌ事(コト)ヲ思(オモ)ヒ
ツヅケテ
七僧法服(シチソウノホフブク) 講師(カウジ)読師(トクシ)呪願(シユガン)ニ礼賁(ライフ)ヲ奉(タテマツ)ル堂童(ダウワラハ) 謂之(イハユル)七僧法(シチソウノホフ)
ノ
みる人々 縫(ヌヒ)やうなどもとりどりなり
もろこしまでの 双紙
ゆきけさうら 漢文(カンブン)ヲ弁古(ベンコ)ノ博士(ハカセ)ども
みとそうやう 仮(カリ)そめ林(ハヤシ)を大裏(ダイリ)うち作(ツク)るを
こひろうを 加増(カゾウ)也
そよおろうろ
夕乃寺う 眺望(テウバウ)殿(デン)
僧の頭(カシラ)の人あの包(ツヽ)もいて書(カ)よ
今一も 女三宮(ヲンナサンノミヤ)源乃(ゲンノ)中将(チウジヤウ)うち泣(ナ)きうかんの文
おそうがんの文 三条文也
よおくくくハ 源(ゲン)のひ沙弥(シヤミ)世乃(ヨノ)ありさま
きゝくぬ 今(イマ)ゝまの祈(イノリ)申(マウ)すことゝもかなへ里
うの文ゝも 三条文 又もち(イ)かなへ里
院の沙そう姫(ヒメ)君(ギミ) 朱雀(スザク)院(ヰン)のなく捨(ステ)の猫を源氏へそうを

とりたてまつる

りの山あつらひ　源の山まうでし
給れる殿　女三のみやの方の西北の
ある人　きこえ給ひ　きこえかは
すきものどもなど　尼うへなども
集りゐて　女三の御心中ひとへに
十五夜の月の　八月十五夜に書うしなひ
ものがたり　などきこえ給ふ　黒
人間にて　源氏人間ばなれ
うくきこえ給ふ　そこゝろぐるしき
うちつゞき　女三の御心中ひとへに
十五夜の月の　八月十五夜に書うしなひ
ものがたり　などきこえ給ふ　黒
人間にて　源氏人間ばなれ
うくきこえ給ふ　そこゝろぐるしき

かみこの大将　なを紙陀の大臣をみて泣給へる　滿
ちゝのきこえ　西の　りの琴
中宮　秋好中宮
もろくこゑうつくしう　聖
かのもろくこゑうつくしう　聖
人きのぬ　松虫を人〻我も
いとへたてゝ　人〻をしみ給
太政大臣の　女三の宮　笙　琴
と西の　と申して源氏の御
いつかはや　大将の君　秋
心をそへて　源氏　女三の宮

なんとの心と如
あのぬと云心なるへし
すく坂をこえて 琴(コト)をかき三の引給へる
月のいとおもしろく 雲うすくたなひきわたれる
少々詩うち誦しなとして 琴(コト)の音(ネ)もいとゆかしく
思ふらむ 逸者琪声(イツシヤキセイ)樂(タノシム)晴
大ねの君 夕雾のいとふかく 具して
あるへう 女三宮の方よりや
とつれく 源討
内々おはしまし 御らんしたまふとありつ
けり格の字と 批判や

[illegible]
なみたも 日みぬ秋をそ思ふ [illegible]
うたふれ
こうひのあるへき所 西白河なる
物心なくし 三条院中納言(イロハ二ホヘト)の御心
ち権大納言 指 を河をあられ
[illegible]そう人を思しやるこそ
いとうるはしうて うちとけ
たることもなく 御(ン)答(ヘ)をや 簾(スタレ)
みその内も 女三指乃(ノ)るを今源氏物語
ひとつうつの心 少将(イロハ二ホヘト)遣水(ヤリミツ)
内なとも 注本通(ヒ)とや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ことなる事　ゑの批判　双
みこ　源と兵アつとは同車也
左衛門督　右宰相
下のさ称ほうり　源氏うり下﨟と書人
柿衣（ムラサキ）袴（ハカマ）とて外指小成兵　褐（キヨ）衣也
ぬえなと　笛と車代中うち
うえもの文　源氏の外とかめてや
冷泉左位ハ時六条院へ
乃時をかろくと思ふまじくとなる也
称ひとつのひ　冷泉三戈
いよくことりの　冷泉源氏の沙汰也

紅虫の事也　兵衛ノ尉死
一源もんとなり
右大弁　紅梅　蔵人頭（クラウドノトウ）
きまりめてなりひら　冷泉院うり
書ひら
ちうこんと云　ひるとぬ乃沙門
ひるーひる八　同八源院へ
乃月と読とも同しくハ
月ゑと云　ハ地云の妙也
なるお源を第一ふりる
神仏外の月ともみてうり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

その夜の事 いと双
ぬるまで ひのうあかるまで
中宮はおはしまさず 秋好
まそのうへ源氏
なれやもけうぬ 院号
きまそつゝ 付也 中宮へ源氏
遣れいのやうに 中宮の
あるべきやうなど 九重
源へうやく〳〵 となり

思ひのかぶ 吟れまぬ 御門 中宮 いよく 御後
それ人の 皆人 それむまさく 也 中うのかた
方をうみん
うのひのうち うをたゝ
を 御なり〳〵 出家の 宮
げみ大やうまで 源氏 裏
脱カ かわ 〳〵 やうもあるなり ひなり
そていとけき ありて 世
ありのまゝ 物とまる
むやとうへ 宮 おまへ
事を 御そくやうまと 思 人

そはりの　後事しめりおと申文共沙汰なと世と通
沙みうなと人の推量（スイリョウ）してやーさん元（コトモト）妻事（サイジ）踏（フム）とも
姫のうもくこそはりの　中文心源乃心のほとそくこそり
沙汰（サタ）あ破つ〳〵心をや
うの大沙ひりん　猶此事の訟なきの分りを成（ナ）し
もくあなさ　ね世や
こりうるよ（此家かとう）　中文の源へやり訟
ちれた両一　猶のけなくてもあるふうくおくきるも
そくれ　別しくの意をとなり

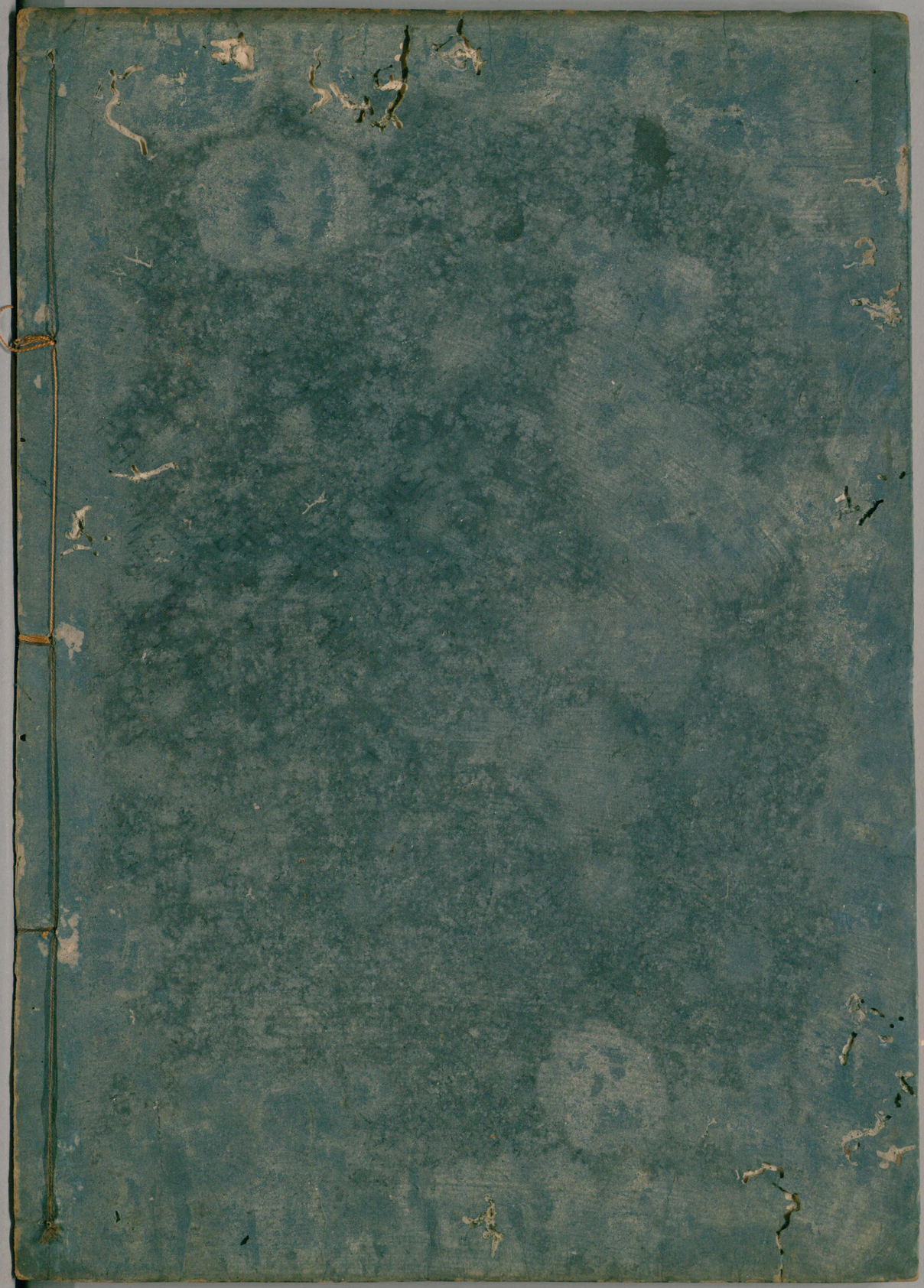
けみさもおほし　源討
物語のうれる
涅槃経曰　亦如勢（ナリ）敷（シキ）不久住（ジュウ）
そくまんり　亜蘭（アラン）那経（ニハ）
又月連救母生天経（ヂ）左（サ）大集（ダイジュ）校（キョウ）比（ビ）獄（ゴク）中（チュウ）　涅槃
二経（ニキョウ）参（マイ）発するの　とんしも　相違そくまき事うと
月連の母れ名を当帝と申人里
仏よりの記　羅漢（ラカン）を仏ふ来（キタ）りとも授記（ジュキ）うおり
しるなとあり　暗
是（コレ）ふりせ　それよ及（オヨ）ふりしとうと　仏も一人してや救（スクヒ）
事なくして死（シ）て亜蘭那経を読（ヨミ）てこの界の七霊（シチレイ）

（ヨウ去）
（ヨウ去）
（ヨウ去）

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118

ガラス使用